ゆだん大敵

山本周五郎

ゆだん大敵

山本周五郎

敵大ゆだん

著者との了解に依り検印は省略致します

昭和三十七年八月十日　印刷
昭和三十七年八月十五日　発行

定価　三五〇円

著者　山本周五郎
発行人　野沢　寛
印刷人　山森忠一

発行所　有限会社　青樹社
東京都千代田区神田神保町二ノ一八
電話(332)五三五一番

―落丁・乱丁本はお取替え致します―

ゆだん大敵

山本周五郎

目次

ゆだん大敵　五
与茂七の帰藩　三六
半之助祝言　五六
花咲く日　八八
金五十両　一〇二
一代恋娘　一一九
与之助の花　一三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

泥棒と若殿　一五五
凌霄花（のうぜんかずら）　一八四
菊月夜　二〇九
青嵐　二三二
紅梅月毛　二五八
そのころのこと　二八一

装幀　山崎百々雄

ゆだん大敵

一

老田久之助が殿の御秘蔵人だということは、長岡藩で知らぬ者はなかつた。

本当の姓は郷田というのだが、それを老田と呼ぶところにもそのあらわれがある、つまり藩主の牧野忠辰は幼名を老之助といつた、その幼名の一字を与えて、「そのほう一代に限り老田となのれ」という下命があつて、それ以来そう呼ぶようになつたのである。

……忠辰は飛弾守忠成の子で、七才のとき母に亡くなられ、また間もなく父にも死別したので、十才という幼ない身で家を継いだ。大叔父に当る牧野忠清が後見となり、老臣たちが補佐をして藩政をみること五年、延宝七年十二月には十五才で従五位下の駿河守に任官し、みずから七万四千石の政治の中枢に坐つた。それもかたちだけではなく、実際に自分で政治を執つたもののようだ。

家伝によると忠辰は牧野家の中興と称されるほどで、生れつき頴悟聡明だつたし、老臣にも稲垣平助、山本勘右衛門、牧野頼母之助などという誠忠の士がいて師傅の役をつとめたから、天成の質が磨かれてはやくその光彩を発揮しだしたのであろう。

十七才で高田城請取という大役を幕府から命ぜられた時など、世人をおどろかすような機智と胆力をみせている。文治にも武治にも、生涯に遺した功蹟は大きく、他の模範となつたものも少なくない。

……だがここでは忠辰を語るのが目的ではないから、われわれの主人公へ筆をもどすとしよう。

久之助は郷田権之助という者の三男で、七才のとき幼君（即ち忠辰）のお相手に御殿へ上つた。

いつしよに五人ほど上つたが、初めから久之助が特にお気にいりで、なにをするにもかれ無しでは済まず、またかれの云うことなら大抵は用いられるという風だつた。

しかしいちどだけこういうことがある、ある時なにを思いついてか、お相手の一人に向つて、

「犬になれ」と云いだした。その少年は厭ですと答えた。

「おれがなれと云うのだ、なれ」

「厭でございます、犬にはなりません」

押し問答をしていると、久之助が忠辰に向つてそれは若君が御無理だと云つた。

「そんな真似をしたら、某はこれからさき御奉公がならなくなります」

そこにはお相手の少年たちがいたし、いちばん好きな久之助にそう面詰されたので、忠辰は怒つて久之助に組付いた、そしてかれをそこへ捻じ伏せて拳で打つた。久之助は避けもせずに打たれながら、

「若君が御無理だ、某が仰せに反いたのは尤もです、さむらいに向つて犬になれと仰しやる法はない」

忠辰にだけ聞えるほどの声で、ゆつくりとそう云い続けた。

誰かが知らせたのだろう、そこへお守り役の老臣で稲垣浅之助という老人が走せつけて来た。忠辰はすばやくはね起きた、久之助もやおら立上りながら、いきなり大きな声で、

「まいつた、まいつた」と叫んだ。

するとかれの鼻からたくたくと血が流れだした。

「なにを御乱暴あそばすか」

駈けつけて来た老臣がそう叱りかけると、久之助は両手で鼻を押えながら云つた。

「相撲のお相手をしていたのです、乱暴をなすつたのではありません、相撲を取つてわたくしが負けたのです」

忠辰は赧くなつた顔を俯向けて黙つていたが、

老臣が去ると少年たちに、
「おまえたちは向うへゆけ」
と云つて遠ざけ、懐紙を出して久之助の衂血を拭いてやつた。
久之助の眼からぽろぽろと泪がこぼれ落ちた。忠辰の頬にも泪の条ができた、どちらも黙つていたが、心の糸とでもいいたいようなものがそのとき堅く結びついたのを、どちらもずつと後まで忘れることができなかつた。
郷田権之助はわが子が特に寵愛されるということを好まなかつた、かれはしばしば久之助に云つた。
「ぬきんでてお気にいるということは正しい奉公ではない、そういう者はとかく同輩のそねみの因ともなり、寵をおのれに取ろうとしてあらぬ競争心を誘いやすい。さむらいとしては殿に苦い顔をおさせ申すように心がけなくてはならぬぞ」
久之助はそうするようにつとめた、お気にいるようになどと執りまわつたことはない、それはわかつているが、それだけに却つて親としては不安心だつたのである。
忠辰が駿河守に任官した年、権之助はわが子を、御側近から離す決心をした、そして老臣を通じて忠辰に上申し、久之助を江戸から国詰にと移して貰つた、そのときかれは忠辰と同年の十五才であつた。

二

江戸を去るときいとま乞いに伺候すると、忠辰はきげんの悪い顔をしていた。
賢い性質だからなにも口にはださなかつたが、不本意だという心持がよく眼にあらわれていた。
「なにか予においてゆくものはないか」
忠辰はそう云う表現で僅に惜別の意を示した。
「お上は殊のほか蜜柑をお好みなされます」
久之助はそう答えた。
「……ほかにも二三、特に御好物な品がおありだと存じますが、向後はそういうものをお嫌いあそ

ばすよう、これだけをお名残りに言上いたします」
「好きなものを嫌いになれと云うのか」
「先日ふと見ました書にこういう言葉がございました、賢を尚ばざれば民をして争わざらしむ、得難きの貨を貴ばざれば民をして盗を為さざらしむ、欲すべきを見さざれば心をして乱れざらしむ。……お上の特に御好物なものは、得難きものほどこれを奉つて御意に協おうとする争心を起こさせます。同様に人を偏してお用いあそばすことも、家中に争心を起こす因かと存じます」
「いまの言葉はなんの書から引いたのか」
「はあ、老子経だつたかと存じます」
「老子は異端といわれている、そのほう老子など読んでは悪かろう」
「毒薬も嚥み方しだいと申しますから」
忠辰はにつと笑いながら頷ずいた。それではこんど会うまでに自分も老子を読んでやるぞ、という意味である、朱子一点ばりの儒臣の眼をかすめて、忠辰が古学や陽明を知つたのもこの手であつた。
久之助は退出するとき、
「蜜柑のことは覚えて置く」という言葉を貰つた。
長崎へ移つてからの久之助は、藩士で後に忠辰の侍読となつた小出経之についてひじようによく学んだ。
それから原田義平太という老人を師に三留流の刀法を修業したが、義平太から手すじの良さを認められ、三年ほど経つと代稽古さえするようになつた。
「なんの道にも天成の才というものがある、そこもとの刀法がそれだ、学んで得られないもの教えて教えられぬものをそこもとはもつている、当藩の三留流は自分一代で終るつもりだが、秘奥とされているものはそこもとに伝えよう」
そう云つて義平太はおのれの会得したものを懇切に伝授した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

……忠辰が帰国すればお側去らずだし、学問でも武芸でも群をぬくし、挙措は慇懃で謙虚だし、数年間は一藩の嘱望と好意が久之助ひとりに集つたようだつた、しかしそれはかれが二十一二才までのことで、それ以後はしだいに性格が変つていつた。

同藩の士に、鬼頭図書という者がいた。類のない偏屈人で、

「おれには尋常な御奉公はできないから」

と云い、若いときから城の内外の草取りを役目に乞い、そのほかにはどんな役にも就かなかつた。あるとき某という者が、

「七万石の御家に二百石の草取りは勿体ないこと」と云つた。

図書はすぐに某の住居へいつて、

「……草取りをしようと下肥を汲もうと、御奉公の一念に誤りがなければよい筈だ、家禄二百石は鬼頭の家に下さるもので、草取りをする図書に賜わるものではないぞ」と呶鳴りつけた。

ふだん余り口数はきかないが、云う段になると遠慮会釈がなかつた、たとえ相手が老臣だろうと足軽だろうとあたり構わず呶鳴りつける、しぜん親しく往来する者もなく、五十才を越すのに娶らず、いとまがあれば二人の家僕と田を耕やしたり畑を作つたりして、徹底して簡素な生活を送つていた。

家禄は二百石余りだつたが、どういうわけか常に貧窮で、着衣はいつも継ぎはぎだらけだし、手作りの草鞋のほかに穿物というものを用いず、食事は年じゅう稗飯に菜汁というありさまだつた。

……久之助は図書の噂を聞いて心を惹かれた。会えばなにか得るものがありそうに思え、訪ねてゆこうと考えながら、しかしよい折もなく年を過していた。するとある年の夏、下城しようとして二ノ曲輪をさがつて来ると、うしろから誰かに呼びとめられた。

ふり返つてみると山のように草束を背負つた中老の男が追つて来る、炎天に笠も冠らず、日に焦

けた黝い逞しい顔は、流れるような汗だつた。
「そこもとは老田久之助というか」
ひどく横柄にそう訊ねた。それからふんふんと鼻を鳴らしながら、こちらをじろじろ見上げ見下ろして、
「わしは鬼頭図書という者だ」
とぶつきらぼうに云つた。
「……そこもとが訊ねて来るだろうと思つて待つているが来ない、わしに会う必要はないのか」
そして山のような刈草の束を負つて、さつさと外曲輪のほうへ去つていつた。

三

久之助がいちど訪ねたいと思つていたのは事実である、図書もまた来るのを待つていたという、いかなる意味にもせよ、
「待つていた」という言葉には心をうたれた。その夜すぐに、久之助は図書の住居をおとずれた。
……家には三つの部屋しかなかつた、むろん雨戸はないし、どの部屋も板敷で畳というものがまるで無い、暗くてよくはわからないが床間の鎧櫃と長押の槍、そして一脚の小さな古机、それが眼につく道具の全部らしい、簡素なくらしだとは聞いていたが、寧ろ荒涼といいたいほど殺風景である、板敷の上へ藁で編んだ円座を置いて、燈火もいれず宵闇のなかに主客は対座した。
「もう間もなく月が昇るだろう」
図書はそう云つて拳で額の汗を拭いた。
「……あかしが無くとも話は聞える、まず、よく来て呉れた」
「かねていちど参上するつもりでいたのですが、つい今までその折がなかつたものですから」
「それならそう思つたときすぐに来るがよい。人間の命は明日を待たぬぞ」
そのひと言は異様な響きをもつていた。そして久之助がはつとしたように眼をあげると、図書はその面を射るようにねめつけた。
「……そこもとは殿の御秘蔵人と云われている。

よほどのお気にいりと聞いたが、いったいどのような性根で御奉公をしておるか、いやそれより、さむらいの御奉公とはどのようなものか存じておるか」
「さむらいの御奉公とは、一身一命を捧げるところから始まると存じます」
「それはどこで終るのだ」
「終りはございません」
「人間は死ぬぞ、死んで奉公ができるか」
「いちど御しゅくんに奉った身命は、たとえ死んでもおのれに戻る道理はございません、すなわち初めはあるが終りはないと信じます」
暗がりのなかで図書はそっと頷ずいた、けれどすぐ追っかけて、それではそこもとはいつなんどきでも身命を捧げられるかと問い継いだ。
「云うだけならどのようにも云える、実際にそれを活かしているかどうか」
「それは口ではお返辞の致しようがありませんん」
「方法はある」
図書はそう云って立った。
「……刀を持って庭へ来られい」
さっさと出てゆく図書の後から、久之助も大剣を右手に持って庭へ下りた。十七夜の月は昇ったが、まだ光が鈍いので庭の内はおどろに暗い、図書はふり返って月を見たが、そのまましずかに刀を抜いた。
「武士の性根は剣にあらわれる、身命を捧げたというそこもとの性根を拝見しよう」
「ここでお相手をするのですか」
「そこもとがまことにお役に立つ人間とわかれば、わしは斬られて死んでも本望だ、その代りそこもとが君寵を偸む似而非武士とわかれば斬る」
図書の声には殺気があった。
「……ここで死ぬものと覚悟をして抜け、いざ」
久之助はじっと図書のようすを見た、それから下緒を外して襷をかけ、袴の腿立をとって、しずかに大剣を抜いた。図書もまたそのようすを見ま

もつていたが、
「待て待て、立合いは明日にしよう」と云いだした。
「……そこもとにも始末すべきことがあろう、人に見られてはならぬ文書、仕残した用、片付けなければならぬ物もあるだろう、今宵その始末をして来られい」
まじめだつた。それではどちらか一人は死ぬ覚悟というのは威しではないのだ、まさかと思つていた久之助はにわかに身がひき緊るのを感じた。
決して他言はせぬという約束を交わし、時刻をうちあわせて家へ帰ると、久之助はすぐに身のまわりの始末にかかつた、常づね注意しているつもりだつたが、いざ片付ける段になると案外に暇どつて、終つたのはもう夜半の二時を過ぎていた。
——これで死んでも悔はない、そう思つてひと眠りし、まだ寝足りないようだつたが、井戸端へ出て頭からざぶざぶ水を浴びた。
定めの時刻にゆくと、図書は泥まみれの妙な恰好をしていた。
「いま田の草を取つて来たところでな」そう云つて笑い、「すぐ支度をして来るから」
と家の中へ去つたが、やや暫くすると着替えて出て来た。
「すつかり片付けて来られたか」
「はい残りなく始末をしてまいりました」
「そうか、ではこちらへ通るがよい」
「すぐお相手をしたいと存じますが」
「なにもう立合う必要はない」
図書はむぞうさにそう云つた、
「……ゆうべ話し残したこともある、今日はゆつくりして飯でも喰べてゆくがよい、馳走をするぞ」
久之助は拍子ぬけのした感じで、図書のあとから部屋へ通り、例の固い円座の上に坐つた。座はずれの樹立で油蟬がやかましく鳴きたてていた。

四

「一身一命を捧げると口では易く云う」

図書はちからのある声で云つた、

「……御しゆくんのため、藩国のためにはいつなんどきでも死ぬ覚悟だ、口では誰もそう云うが、家常茶飯、事実のうえでその覚悟を活かすことはむずかしい。昨夜そこもとは身命を上に捧げたといつた、その言葉に嘘はないだろう、覚悟もたしかなものに違いない。だが実際にはその覚悟を活かしていなかつた、……他人に指摘されて、急いで始末をしなければならぬような物を、身のまわりに溜めて置いた、死後に発見されては身の恥になるような物をさえ始末もせず、ただ覚悟だけいつ死んでもよいと決めたところでから念仏にすぎない、そうではないか」

久之助は低く頭を垂れた、全身の毛穴から一時に冷汗がふき出る感じだつた、たとえば蛙がくるつと皮を剝かれたように、皮膚をひき剝がれて裸肉を曝されたような気持でさえあつた。

「いま庭さきで、すぐ相手をしようとそこもとは云つた、身のまわりをきれいに始末して、もう死んでも悔はないという気持であろう、……それではじめて、『いつなんどきでも身命を捧げる』ということができるのだ。さむらいの鍛錬は家常茶飯のうちにある、拭き掃除、箸の上げ下ろし、火桶えの炭のつぎ方、寝ざま起きよう、日常瑣末な事のなかに性根の鍛錬があるのだ、そしてその瑣末な事にゆだんがなければ、改めて覚悟せずとも奉公の大事をあやまることはないのだ」

一語一語を鋭い鑿で心臓へ彫りつけられるような感じだつた。久之助は頭を垂れ、両手でぎゆつと汗を握つている。

……昼にはかねて聞いていた稗飯と菜汁の食事が出た、菜汁の中には大きな泥鰌がはいつていて、おそらくそれが「馳走」というのであろう、図書はそれをうまそうに頭からばりばりと喰べた。

久之助には稗飯というのがそもそも難物に思えたし、拇指ほどもある泥鰌のまる嚙りはさらに閉口だつた。けれども喰べてみると稗飯は香ばしくてうまいし、味噌あじのしみた泥鰌の溶けるような肉味や、嚙み砕く骨の荒々しさもなかなか悪くはなかつた。

しかもぜんたいに云いようのない豊かな感じが溢れている、材料が粗末なだけ、それを大切に活かすつつましい心が籠つていて、どんな珍羞も及ばない豊かな深い味を創りだしているようだ。

――そうだ、これが食事というものだ。

汁椀の中の青々とした夏菜を見ながら、久之助は心からそう頷ずいた。

「これから折々お訪ね申したいと存じますが、お許し下さいましようか」

食事のあとでそう訊くと、図書はにべもなく無用だと答え、節高な太い指の、大きな手を振つた。

「もう会う必要はない」

そして大きな眼でぎろりと睨んだ。

久之助はその頃から性格が変りはじめた、はじめは周囲の者は気づかなかつたが、なんとなく俊秀なところがぼやけ、挙措もしだいに精彩を失なつてゆくので、――やつぱり二十で凡人の例か、とひとしきり蔭口が弘まつた、しかしそれさえほんの僅かな期間で、暫らくするとそんな蔭口さえ立たない平凡な存在になつてしまつた。

かれが二十三才になつたとき、しゆくん忠辰の申付けで、刀法修業のため江戸の柳生家へ入門した。忠辰が小野次郎右衛門についてまなんだので、久之助には柳生を選んだのである。これを忠辰に推挙したのは原田義平太であつた。

……柳生家はそのとき対馬守宗在の代だつた。宗在は飛弾守宗冬の二男で、長男宗春が世を早めたため家督を継いたが、かれ自身もあまり健康には恵まれなかつたようだ。しかし父祖同様、将軍家宣に刀法を教授するほどだから、その道に達していたことは記すまでもないと思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo